

たかやす
高安の

龍ゴウ祭

じゅうにねん
十二年に一度

辰年の大豊年祭



ヒーヤイ！ヒーヤイ！

不思議な掛け声が

どこからか聞こえてきた。

家の外を見てみると、家の近くの道で、

大きな旗を持ったお兄さんや

真っ赤なおみこしみたいなものを運びながら、

たくさんの人たちが

声を上げながら歩いていった。



おお 大きな旗を上下に揺らして、
旗の周りを棒でがちゃがちゃ鳴らしながら、
ヒーヤーイ！ヒーヤイ！と
声を出している。
指笛もピユイピユイなっていて、
とってもにぎやかだ。

「ばあちゃん、あの人たちは何をしているの？」

「今日はねえ、【龕ゴウ祭（ガンゴウサイ）】と言って
十二年に一度のお祭りがあるのよ。
外にいるお兄さんたちは、お祭りの途中で、
高安の地域を歩いて回っているの。道ズネーっていうんだよ」



「お祭りって、出店がいっぱい並んでて、
ごはんとか、くじ引きとかがあるやつでしょ？
みんな白い衣装でおみこしとか
おっきな旗？をもって歩いてるだけじゃない」

「あっはっは。あれはおみこしじゃないよ。
あれは【龕（ガン）】って言ってね。
昔は人が亡くなったら、あの【龕（ガン）】に入れて、
お墓まで運んだんだよ」



「えっ！そうなの？今は使っていないの？」

「今は亡いまくなつた人の骨ほねをお墓はかに持つて行くからね。

あれでは運はこばないよ。

でもね、昔むかしから使つかつてきた大切なものだから、

十二年に一度、辰年じゅうにねん いちど たつどしに【龕がん（ガン）】を祀まつった

お祭まつりをするんだよ。

もう何百年も続つづいているんだって」

「へえー！なんでそんな祭まつりが始はじまったの？

ばあちゃん知しってる？」

「じゃあ、わたしのおじいちゃんから
聞きいた話はなしをおしえてあげようかね。」



むかーしむかし。

平良たいらという地域ちいきに住すんでいる

テーラシカマグチという男おとこと、

名前なまえはもうわからなくなつたけれど、

豊見城とみぐすくという地域ちいきに住すんでいる

沢岬家たくしけ じなんぼうの次男坊じなんぼうが、

唐とう（今の中国いま ちゅうごく）に出掛でかけることになつたんだ。



昔はねえ。海の向こうに行くなんて、
そりゃあとっても大変なことだね。
この二人も何とか唐に行ったんだけど、
残念なことに沢岬家の次男は、
琉球に戻ってこれなかったんだ。

一緒に行ったテーラシカマグチは
とっても心を痛めてね。

唐で買ってきた【龕（ガン）】を
沢岬の家にあげたんだよ。



沢岬の家の人は、この【龕（ガン）】を
家の蔵の中にしまうことにしたんだけど、
蔵の中にはシーサーもしまわれていてね、
このシーサーと【龕（ガン）】が、
毎日毎晩喧嘩をするようになったんだ。

困ったのは沢岬の家の人さあね。

夜中にワーワー喧嘩するから、
夜も眠れなくなって、とうとう沢岬の家の人、
シーサーを我那覇の知り合いに譲って、

【龕（ガン）】は、高安の人たちに譲ったんだって。

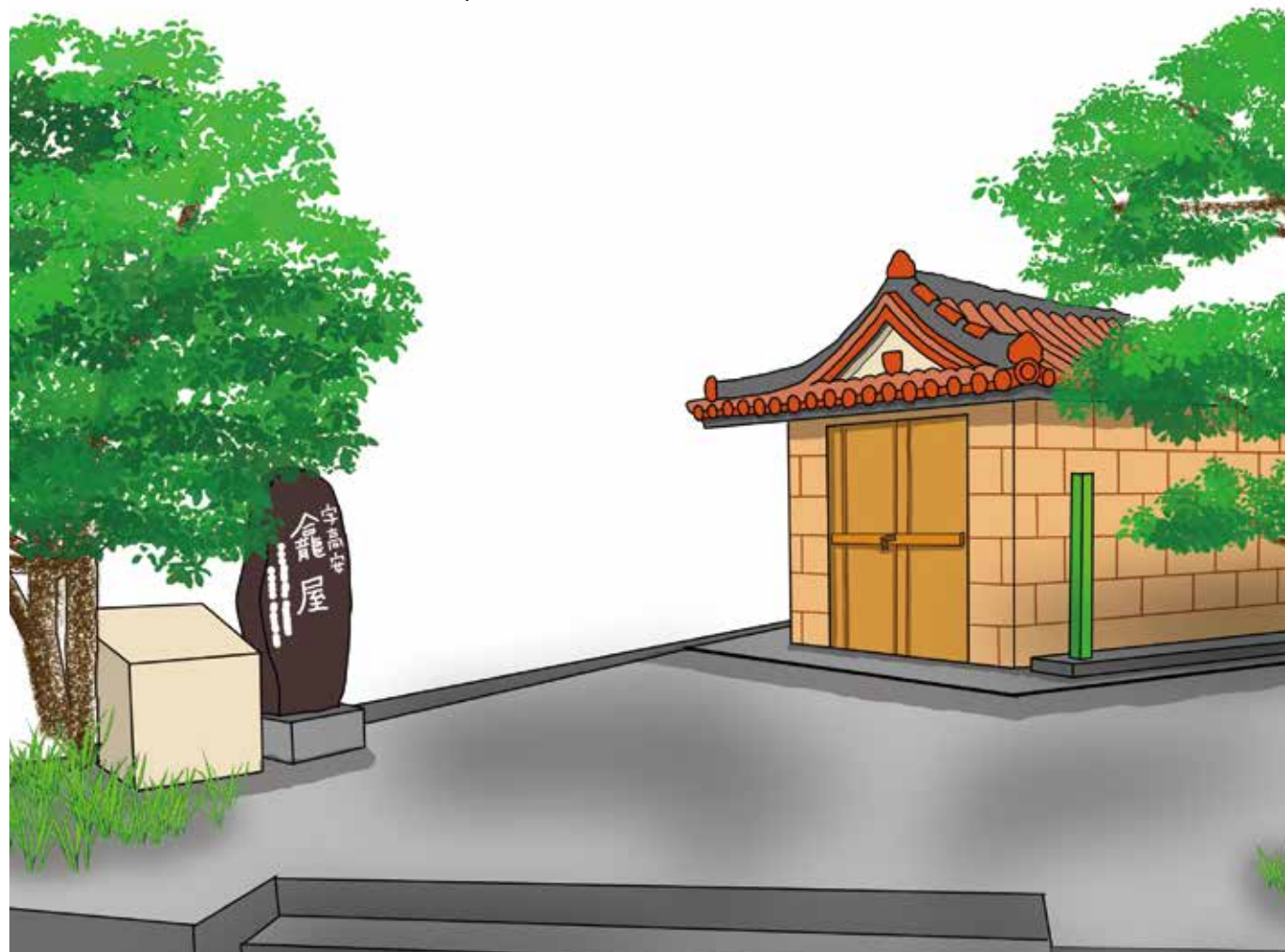


この【龕(ガン)】を、
高安の人はとても大事にしてね。
高安に住んでいる人々が
いつまでも元気で幸せに暮らせるように、
十二年に一度、辰年が来るたびに、
こうやって【龕(ガン)】を出してきて
【龕ゴウ祭(ガンゴウサイ)】を
するようになったんだって。



ばあちゃんの話をききながら、
歩いているとまわりの人たちが
ガンヤーにいくよーって言っていた。
「ガンヤーって何？」

「この【龕(ガン)】のお家だよ。
今からそこで、みんなで拝みをして、
高安の地域のみんなが健康で、
元気に過ごせますようになって
お願いするんだよ」



ガンヤーでお祈りを済ませると
ばあちゃんはニコニコしながら

「はい！じゃあ

コーノユーエーに行こうか！」

と歩き始めた。

「コーノユーエーって何？」

またわからない言葉が出てきたので
ばあちゃんに聞いてみた。

「コーノユーエーは公民館でやる

【**龕**ゴウ祭（ガンゴウサイ）の

最後のイベントよ。

みんなでご飯食べながら

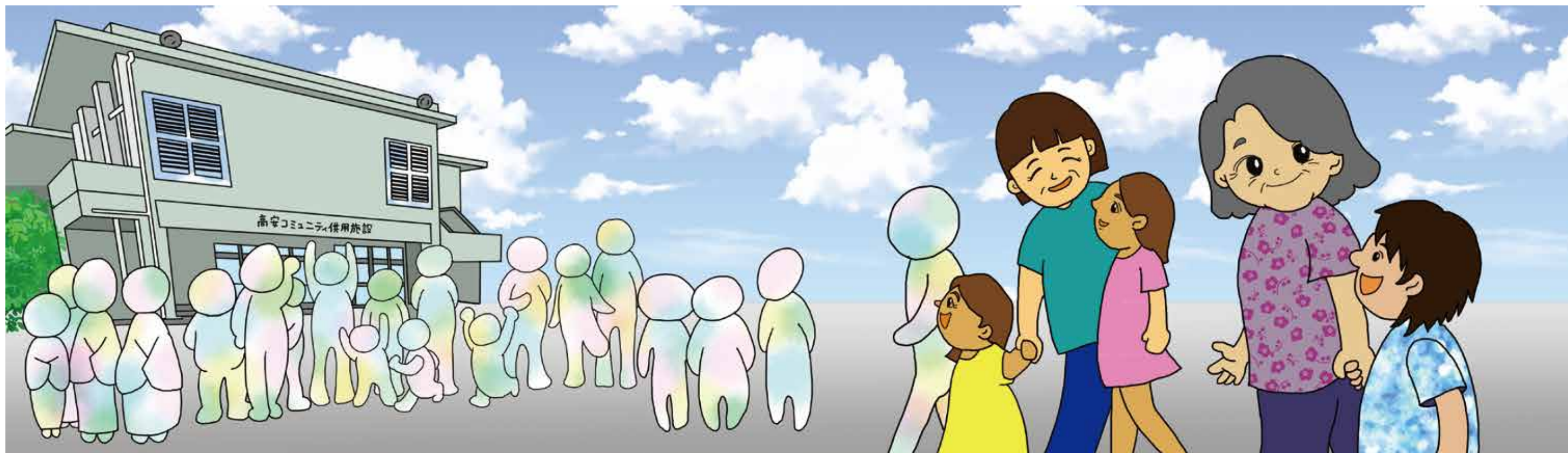
無事に【**龕**（ガン）】にお祈りすることが
できたのをみんなでお祝いするのよ」

と、とても楽しそうだった。

いつもは友達と一緒に遊んでいる公民館は、

たくさんのおとな、かつこい衣装を着けた

お兄さんたちでいっぱいだった



しばらくすると
 金色の扇をもった女の人たちが踊りだした。
 伝統の踊りなんだって、
 ばあちゃんが教えてくれた。

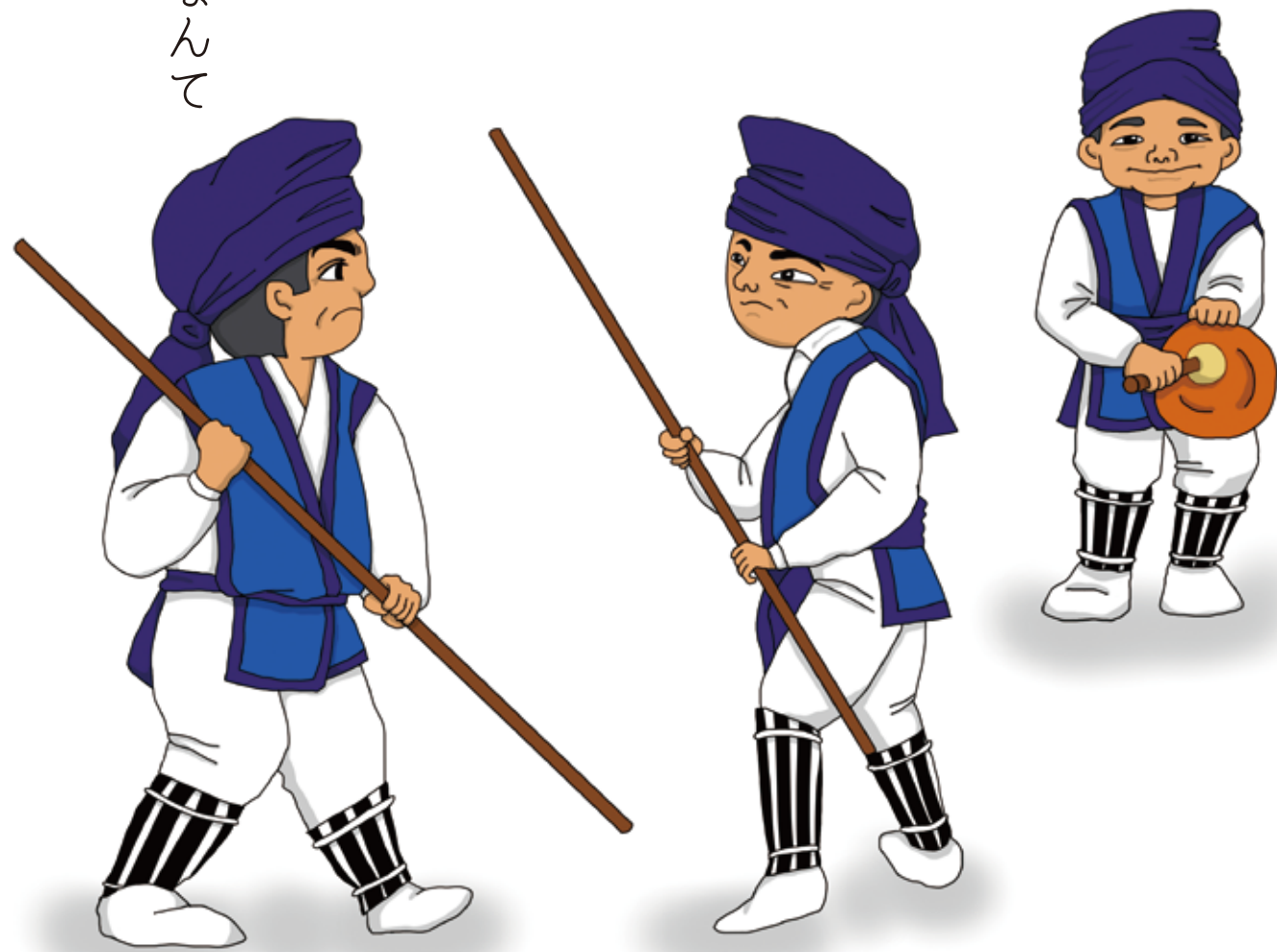
踊りの次は棒の演武が始まった。
 棒を持った男の人が二人で
 カンカン打ち合ったり、
 もっとたくさんの人たちが出てきて
 いろんな棒の演武をしたり。

「みんなこの日のために
 仕事帰りに公民館に行って
 練習してたんだよ。」

「だからお父さん：
 最近いつも帰り遅かったんだ：」

棒の演武をするお父さんの姿を見て
 少し誇らしい気持ちになった。

「何百年も続いているお祭りがあつたなんて
 僕、全然知らなかったなあ」



高安の龕ゴウ祭資料

高安の龕ゴウ祭は12年に一度、辰年の旧暦8月9日に開催されており、龕の修復等も兼ね、無病息災と豊年を祈願する地域祭祀として250年以上の伝統があると伝えられています。

「龕(ガン)」とは、棺を運ぶための葬具で屋根の輿のことであり、1952年(昭和27)に再建し、1970年(昭和45)頃まで実際に使用されていたものである。「龕(ガン)」本体は榎、檜、杉が使われ、全体が朱色の漆塗りで彩色され、四面には僧侶や蓮の花などの仏教的な絵が描かれていて、普段は「龕屋(ガンヤー)」と呼ばれる場所で安置されている。



「龕屋(ガンヤー)」へのミチズネー



高安の「龕屋(ガンヤー)」

辰年以外の年でも毎年旧暦の8月9日には「龕屋(ガンヤー)」の扉が開けられ、中に納められている「龕(ガン)」の状態を確認し、供物を備え、無病息災が祈願されている。同時に高安の「龕(ガン)」とゆかりの深い字豊見城の屋号「沢岬」の家にも出かけ拝みを行っている。



公民館前で繰り広げられるガーエー

【旗頭について】高安の旗頭は竿頭に槍、長刀を飾った2本あり、双方とも龍の口から槍、長刀が空に向かって伸びた形をしている。掲げる旗は槍の旗文字が「勸農」、長刀の旗文字が「深耕」で農耕との関わりを表していて、龕ゴウ祭のみに使用されている。



地謡



かぎやで風



棒術：ヘーイ棒



【漢字のお勉強?!】龕ゴウ祭の龕の文字をよ〜く見てみると…「龍」が「合」と書いて「龕」って書くんだヨ! だから「辰年」に祭りをするのかな? おもしろいね!

次の【龕ゴウ祭(ガンゴウサイ)】は十二年後か・・・また次もばあちゃんと一緒にいたらいいなあなんて考えていたら「さあ、最後はカチャーシーだよ! はい! 行こう!」

先に行くばあちゃんを追いかけて、僕もカチャーシーの輪の中に入っていた

次の【龕ゴウ祭(ガンゴウサイ)】でも一緒にカチャーシー踊ろうネ!



高安の竈ゴウ祭 ー十二年に一度・辰年の大豊年祭ー あとがき

地元の歴史・文化広め隊 代表 新 田 宗 市

竈ゴウ祭は、「竈」という沖縄で昔の埋葬方式が風葬だった頃に使われていた死者を運ぶための道具に由来します。

高安だけでなく、県内各地で竈は使われていましたが、高安地区では十二年に一度、辰年にこの竈を盛大に祭る行事が行われています。

昨年、保栄茂地区の巻手棒につづき、今年は高安の竈ゴウ祭についての絵本を作らせていただきました。

竈に対して拝みをするだけでなく、旗頭や舞踊、棒の演舞など、この祭りは、竈ゴウ祭が終わったあとのコーノユエーにいたるまで、高安の人たちの伝統行事としての側面と、地域の親睦を深めるための側面が融合したまさに地域のための祭りだと言えると思います。

竈ゴウ祭という伝統行事と、コーノユエーという地域のまつりが融合した、ここにしかない独特な祭りを、ぜひ一度見てみたい！とこの絵本をつくりながら何度思ったかわかりません。

しかし、地域の祭りの中でも、十二年に一度しか行われないこの竈ゴウ祭は、残していくことが難しい部類に入る祭りだと私は思います。

地域に住んでいる人が少なくなれば、祭りを知る人も減ってしまいますし、参加する人が減ってしまうと、やはり祭りを維持することができなくなってしまう。

岩手県奥州市の蘇民祭という千年以上続いたとされる祭りが、先日その幕を下ろしました。参加者の減少と、運営に携わる人たちの高齢化が理由とされています。

県内では、まだ過疎化や少子化の影響は少ないと言えますが、これから先、いつまでもこの竈ゴウ祭が続いていけるように、子どもたちに絵本を通して、祭りの楽しさや面白さを伝えられたいなと思います。

今回は十二年に一度という機会にめぐりあい、ちょうどいいタイミングで絵本を発行できることもあって、高安自治会の皆様には竈ゴウ祭についての詳しいお話を伺ったり、資料を提供していただいたり、お忙しい中こころよく絵本の制作にご協力いただきました。本当にありがとうございます。

今年発行したこの絵本が、子どもたちが十二年後、二十四年後、六十年後の竈ゴウ祭に参加してくれるきっかけになることを願っています。

高安の竈ゴウ祭

ー十二年に一度
辰年の大豊年祭ー

企 画・地元の歴史・文化広め隊	
（豊見城市商工会青年部有志の会）	
代 表	新 田 宗 市
	兼 島 正 美
	與 那 城 瑛 太
	外 間 和 也
	知 念 章 太
協 力・豊見城市教育委員会文化課	
豊見城市字高安自治会	
制 作・	文を書いた人 新 田 宗 市
	絵を描いた人 兼 島 正 美
発行日・	二〇二四年八月一日
発行所・	豊見城市商工会青年部
	〒九〇一ー〇二四二
	沖縄県豊見城市字高安三五八一ー二
	☎〇九八一八五〇ー二〇六〇
	FAX 〇九八一八五〇ー〇四六二

印刷所・いろは総合印刷

〒九〇一ー〇二二ー

沖縄県豊見城市字饒波一一四〇ー五

☎〇九八一八五〇ー五五四二

FAX 〇九八一八五〇ー〇七六八

本書の無断転写、転載、複製を禁じます

＊このお話は、史実を軸に創作されたフィクションです